

『少年義勇軍』と『満蒙開拓少年義勇軍』から見る 児童文学作家山田健二

柴田 哲谷
愛知学泉大学

Yamada kenji a Juvenile literature writer In “Syonen Giyugun” and “Manmokaitaku Syonen Giyugun”

Tetsuya Shibata

キーワード：少年義勇軍 Armed Volunteer Farmer Boys、満州国 Manchurian Country
国策 National policy、戦後 Post-war、ヒューマニスト Could be a humanist

1. はじめに

日中戦争時代、山田健二は南満州鉄道社員にして児童文学作家であった。彼について先頃、魏晨氏が「日本人、『満州国』民、満鉄社員であること—山田健二の童話を中心に—¹⁾」という発表をされた。これは、満州で育ち、国策会社満鉄に勤める立場を持つ山田が、「満州少国民」をどのように将来の満州国建設に向かわせようとしたのか、という問題意識に貫かれている。魏氏は指摘した。

山田健二は童話作品を通して、「満州国」の現実を見る眼差しと、解釈の枠組を子供に植え付け、更に現実を改善した理想な未来像を創る使命を子供に託そうとした。山田は其中で、日本人の子供が絶対的な優位性を持ちつづける権力性を欲望する。²⁾

山田が「五族協和」による満州国の発展を願っていたことは、魏氏の援用する「大満州をバックにした美しい童話、民族協和を題材にした涙ぐましい物語の作家として……」（安倍季雄³⁾）などからもうかがえる。が、格差や貧困といった「満州国」の現実に向き合う子どもを描くのに日本児童の優位性が意図的に押し出されたか否かは判断しがたい。

戦時の山田が客観的に見て国策遂行者だったとして、それは山田の本質なのか。戦後、彼は

そのような自身を批判し、変わったのか。戦中も戦後も子どもの本当の姿を見つめることなく、独善的なヒューマニズムに立ち続けたのか。

現在、これらの疑問に答える山田健二研究は見当たらない。本稿は、「少年義勇軍」をテーマとして書かれた戦中と戦後の2作品を比較することによって、山田の一端を知ろうとするものである。

2. 山田健二の履歴

山田について、『日本児童文学大事典 第二巻』⁴⁾は次のように説明している。

1903（明36）年6月26日～没年不明。作家。東京生まれ。満州に住んで満鉄勤務のかたわら童話創作に励んだ。処女出版は『高梁の花環』（34・9 新生堂）で標題作初め10編の「満州童話集」だった。翌年安倍季雄の推薦で童話作家協会会員となり、第二童話集を出した。戦後は作風を一変し、『少年砲手長』（49 内田書店）『波濤を越えて』（52 文園社）『光る氷山—南氷洋の秘密』（55 国際図書）などの海洋少年小説を発表した。

戦後は「海洋少年小説」に転じたとあるが、彼は終戦の際多数が犠牲となった少年義勇軍に深く思いを寄せていたようで、『満蒙開拓少年義勇軍』の序に「鎮魂の書」（福田清人）との評言

5)が見られる。(『高粱の花環』⁶⁾は、表紙にも本文にも「高粱」と表記されている。)

また、『満蒙開拓少年義勇軍』の「奥付」には次のようにある。「／」は改行を表す。以下同)

明治36年生まれ、東京都港区六本木出身。／旅順工大在学中、高等文官合格、昭和24年、草加幼稚園設立、園長30年。かたわら、児童文学に精進す。著書『満州開拓少年義勇軍』、『光る水山』等16冊。その他子供の雑誌に執筆、童謡・校歌・社歌・子供賛美歌等多数。／NHK連続放送劇原作をはじめ、新聞連載140回、放送台本執筆約500冊、放送約300回を数える。また、ステージ放送、学校講演(幼稚園・小・中・高等学校)等数知れず活躍。

同書末尾の「再刊にあたって」という山田夫人の文章に、「主人は七十三歳でこの世を去るまで、まるで子供のような純粋さを持ち続けた人でした」とある。すると没年は、1976年(昭和51)ということになる。

神奈川大学の「図書館だより」には、山田が登場する記事の抜粋が載っている。日本最大の国策会社満鉄の威光をうかがわせる。

交通公社となってからは文化事業部編集課となって部長には満鉄から佐藤眞実氏が廻ってきた。新社屋の編集室に続いた部長室で月々の編集会がありその時は満鉄弘報課から山田健二、前田昇両氏が出席する慣わしであった(三宅豊子『彷彿月刊』2003.8)。⁷⁾

山田は「高文」合格のエリートで、戦中は満鉄の文化関係の部門を担当し、戦後は幼稚園教育や執筆・講演などを通して児童に精力的に関わり続けたようだ。「子供のような純粋さを持ち続けた」という夫人の言葉はそのまま彼の本質を表すのかもしれない、しかしまた、客観的な自己省察を欠く独善的な一面を窺わせると言えなくもない。

3. 『満州開拓少年義勇軍』と『満蒙開拓少年義勇軍』の関係

本稿は、山田がこだわった「少年義勇軍」をテーマとする戦中と戦後の作品の違いをすることによって、作家としての彼のありようを知ろうとするものであった。戦中の作とは1938年刊

行の『少年義勇軍』に他ならない。一方、戦後の作品には、『満州開拓少年義勇軍』と『満蒙開拓少年義勇軍』がある。本節では、まずこの二者の関係を明らかにしておく。

『満蒙開拓少年義勇軍』(満州叢書)末尾、国書刊行会編集部の付言には「本書は昭和四十二年に刊行された『満蒙開拓少年義勇軍』(草加幼稚園)を再刊したものである」とある。ならば、1983(昭和58)年刊行の「満州叢書」版は、1967(昭和42)年版(未詳)と同内容である。一方、『満州開拓少年義勇軍』は1967(昭和42)年に草加幼稚園から刊行されている。

すると、『満州開拓少年義勇軍』と1967(昭和42)年版『満蒙開拓少年義勇軍』は同書である可能性がある。

以下、『満州開拓少年義勇軍』と「満州叢書」版『満蒙開拓少年義勇軍』を比較し、このことを確認する。

両書において、石森延男「あの風 あの雲」、福田清人「序」および目次は全く同じである。本人による「あとがき」も、「爾来」が「以来」に変わった以外は同文である。なお、『満蒙～』では、夫人の「再刊にあたって」、国書刊行会の「刊行にあたって」、および編集部の付言が加わっている。また、『満州～』は目次の後に簡略な「満州鉄道図」が、『満蒙～』は表紙裏に地図が入っている。

本文全体の分量は、『満州～』が20字×18行、2段組で180頁、『満蒙～』が40字×15行、1段組で247頁である。単純にかけ算すると129,600字から148,200字に増えているように見えるが、一段組では改行による空白が多いので内容が増加したとは限らない。

本文の異同(『満州～』から『満蒙～』への変化)については極めて限定的で、漢字の送り仮名を改めた、読点を減らした、形式段落を減らした、カギ括弧内のカギ括弧を二重括弧に改めた、カギ括弧内の句点をなくした、といったことが認められる。また、「みんな(これが目抜き通り……?)と」などの()が無くなっている。

「第一部 創生期」冒頭の「大陸へ 国境へ」の章についての詳細は、以下のとおりである。8カ所の異同は全て表記や事実についての訂正

に留まっている。

- 14 頁：東宮中佐 → 8 頁：東宮少佐
- 15 頁：海を越へ → 8 頁：海を越え
- 16 頁：従兄妹 → 10 頁：従妹
- 16 頁：満州事変が日華事変に拡大された頃
応召し → 10 頁：満州事変の頃応召し
- 16 頁：令子の父も、宏の父より一年ほど遅
れて → 11 頁：令子の父も宏の父より遅れて
- 17 頁：引きとられていた → 11 頁：引きと
められていた
- 19 頁：おまいたち → 14 頁：おまえたち
- 20 頁：幼年学校時代から → 15 頁：幼年時
代から

また、他の章段（抄出）において主なものを
拾ってみたが、やはり表記や事実の訂正であっ
た。

- 65 頁：昭和二三年 → 78 頁：昭和一三年
- 80 頁：特意 → 99 頁：得意（他にも）
- 94 頁：ヒヤヒンス → 119 頁：ヒヤシンス
- 112 頁：余悠 → 142 頁：余裕
- 119 頁：しかつめらしい → 152 頁：しかつ
めらしい
- 122 頁：本日 → 156 頁：日本（二カ所）
- 122 頁：千 → 157 頁：二千
- 164 頁：精養 → 215 頁：静養

以上により、1983（昭和 58）年刊行『満蒙開
拓少年義勇軍』は、1967（昭和 42）年刊行『満
州開拓少年義勇軍』と内容的に同一であり、後
者の誤記や句読点、括弧の使い方および年号等
事実の訂正に留めた改訂であったことがわかつ
た。（本人が亡くなっている以上、内容に踏み込
めないのは当然と言えるが。）

なお、1967（昭和 42）年に『曠野にける虹
—ある満蒙開拓青少年義勇軍の物語』が刊行さ
れているようだが、これについては未詳である。

4. 『少年義勇軍』について

この作品は、1938（昭和 13）年 12 月 20 日、
大連にある満鉄社員会から刊行された。山田は
この時、満州国首都の奉天（現在の瀋陽）在住
である。なお、「満州国」は関東軍によって 1932
年 3 月に中華民国から独立、日本人・漢人・朝
鮮人・満洲人・蒙古人の「五族協和」をスロー

ガンとしていた。

刊行の前年 7 月に起こった盧溝橋事件によっ
て日中は全面戦争に突入し、同年 12 月 13 日、
首都南京が陥落した。『少年義勇軍』の発刊時期
には、新首都重慶への爆撃が始まっている。

こうした中で作品を成した動機について、「自
序」は次のように言う。

今年満州で一番嬉しい出来事の一つは、日本中から集
った三万人の満蒙開拓青少年義勇軍が、鍬の柄を銃の
かはりに担い、海を渡って、堂々と満州に行進して来
たことでせう。……／私は此の少年義勇軍がとても好
きですし、また今年は少年義勇軍が、初めて出来た記
念すべき年なので、此の本の題も「少年義勇軍」とし
ました。／納めた十篇は、どれも前著「高粱の花環」
や「慰安車」と同じやうに、美しい満州、正義の満州、
平和の満州を描いた実話風の童話や物語です。

全編が少年義勇軍をテーマとしているのでは
なく、各編の主題・内容には、山田が「美しい
満州、正義の満州、平和の満州」と言う以上の
共通性はない。時局への視野は広がっておらず、
目前の日常に美しいものを見出そうとしている
ようである。

次に、山田が描こうとしたものをとらえるた
めに、各編の内容を概観する。便宜上、番号を
付した。

①「中間駅の出来事」（分量：12 頁）兄弟（弟
は小学 3 年生）が、列車内で病気の赤ん坊を抱
いた母親に席を譲る。弟は兄に貰ったキャラメ
ルを機関士に分け与える。

②「苦力の神様」（分量：18 頁）奉天医大創立
時、ケンブリッジ大卒の若い英国人医師が、苦
力たちを苦しめている伝染病に立ち向かい、命
を落とす。

③「お星さまと大蛇」（分量：14 頁）海辺に住
む大蛇が、村長の四姉妹の長女を食べると予告。
長女は妹と星に祈った。満願の 100 日目に大蛇
は星に潰され、姉妹は助かる。

④「旧師を訪ねて二十年」（26 頁）大連の小学
生がセメント工場を見学した際、鉄球がなくな
った。盗んだ者は名乗り出ず、担任が辞職する。
それを知って申し出た生徒は担任を捜し続けた。
20 年後、ボルネオにいと判明し、手紙のやり
とりをする間、担任は事故死してしまった。

⑤「饒河少年隊」(分量：30 頁) 少年義勇軍の先駆となった饒河少年隊の生活を著者が隊員から取材し、雑誌に発表したもの。設立の経緯、法元・神田・大穂といった指導者のエピソード、隊舎建築の苦勞や工夫(夏冬で構造の異なる便所、犬の皮で作る靴下)、隊員の死、寮の日課等が紹介されている。この話については、次項で述べる。

⑥「金鵝勲章と盲馬」(分量：18 頁) 満州事変勃発後の山海関、軍馬の産地岩手の兵が愛馬を駆って斥候に出て被弾。下肢切断の重傷を負ったが、敵状を記したメモと敵将を斃した功により金鵝勲章を受賞。後に愛馬を求めて現地に赴き、再会。馬を保護した村長は、彼が撃たれた後、馬が敵将を蹴殺したと語る。村長に謝礼を固辞された兵は、銃撃で盲目となった馬のために小屋を建てることにした。

⑦「クリスマス・プレゼント」(分量：8 頁) クリスマスの長春。列車から降りたロシア少年が教会の入口に立ち、病気の母を訪ねると言う。ロシア語教師である彼女を知る日本人少女は、賛美歌の順番を気にしつつ、彼を案内する。母は引っ越していたが探し当て、少年は母に再会する。教会へ戻ると賛美歌は終わっていたが、少女は嬉しかった。

⑧「必ず死ぬ病氣」(分量：18 頁) 動物の病気で、人間に感染すると数週間で命を奪うとされる鼻疽に罹った獣医は、苦しみながらもその身体を研究に捧げつつ、人々に惜しまれて世を去って行った。

⑨「少年移民隊長」(分量：18 頁) 主人公は寄宿舎に暮らす移民小学校の一年生。移民村隊長の父は週末に村から馬で迎えに来る。ある土曜、隣人が迎えに来た。父は匪賊と戦って亡くなったのだった。葬式の日、少年は帰国の勧めを断り、村で暮らすと言った。人々は決意を褒め、彼を次の隊長に推す。

⑩「馬に乗ったラマ僧」(分量：24 頁) 少年競馬の昨年度優勝者テムールは、長男ゆえに蒙古人の慣習によりラマ僧になることに。今年は弟が出場する。競馬が行われる祭日、日本人守備隊長の自動車に馬が驚き、弟は投げ出されて気絶する。軍医が輸血して弟は蘇生、人々は魔術かと驚く。テムールの思いを聞き、馬術に長け

た隊長は活仏の許しを得て彼を競技に出させる。テムールは優勝した。隊長は彼を自分の子とし、東京で大和魂を叩き込み、騎兵学校に入れたいと活仏に申し出た。活仏は許し、彼は喜んで両親にお願いに行く。

上に見るところでは、10 編のうち戦争や満州国、日本軍人への賛歌そのものと言って差し支えないような話は、⑤「饒河少年隊」、⑥「金鵝勲章と盲馬」、⑨「少年移民隊長」、⑩「馬に乗ったラマ僧」の4編であり、これらは分量も比較的多い。中でも「饒河少年隊」はその傾向が突出している。

他の6編は美談や民話で、戦争や満州国賛歌ではない。人間の行いへの感動といったものが主題となっている。

本作は必ずしも「少年義勇軍」を押し出し、国策への馴化を露骨に促すものではない。しかし、さまざまな話が散りばめられているからこそ、全体として、これを読む児童に「五族協和」を自然なものとして一魏氏の言う日本の子どもがリードするという形も含めて一受容させる効果を持っていたとも考えられる。ただ、それは結果としての話であって、山田の創作活動が、国策会社満鉄社員として強い意図を持って国家と軍の意向に子どもたちを沿わせるものであったと断言することには慎重でありたい。

5. 「饒河少年隊」について

「饒河少年隊」は、『少年義勇軍』10 編の中でも30 頁(38 字×12 行×30 頁)を占めて最大であり、内容的にも特異である。(なお、地名である「饒河」には、「ぜうが」とルビが振られていて、『満州開拓少年義勇軍』と『満蒙開拓少年義勇軍』が「ぎょうが」と読むのとは異なる。「饒」は『漢語林』には「じょう」とある。)

30 頁のうち、4 人の指導者に関する内容が15 頁で、全体の半ばに上る。初めに登場する東宮中佐(23 行)は、「移民の神様東宮中佐」と評されているが、事績や人柄等に関する具体的記述はない。次に法元寮長は分量が最大(65 行)で、「神の人法元先生」、「靈感」の持ち主、「女中さんにまで注ぐ愛」などと称揚されている。神田大尉(21 行)は「剣道六段、師範を負かす」

人物であり、大穂参事官(64行)は「頭山満翁の秘蔵弟子」、「良寛和尚の生れかはり」とされ、「敵前十米」で銃弾に倒れて「天皇陛下万歳」と叫んで戦死する。何れも超人的な軍人として理想化されている。その描写は次のようである。

東宮中佐は申すまでもなく、満州の移民計画が最初僅かに安奉線沿線の小規模なものであったのを東満や北満の国境近くまでに拡大し、二十カ年・百万戸・五百万人の国策移民にまで仕上げた移民の神様。(75頁)……法元辰二先生は、陸軍予備少佐で本年五十六歳、骨の髄まで皇道精神でかたまつた昭和の吉田松陰。無敵皇軍の中堅をなす青年将校から神様のやうに敬慕されてゐる……(75頁)

剣道六段の神田先生は、……クロールだとかプレストなどは、口にしても叱りつける位の徹底的な国粋主義者で、日本古流の抜手でウスリー江の流を截る先生の勇姿に、少年達は胸を躍らすのであった。(81頁)

僧兵のやうな偉大漢が大穂参事官であった、……頭山満翁の秘蔵弟子……。……少年達に皇道世界宣布の大精神を説き、大和民族大陸移動の国策遂行と亜細亜大陸の開拓を絶叫し、彼等に東部ウスリーの重鎮たれと訓へた。(83頁)(原文は旧漢字、総ルビ。)

このように4人の指導者については、大仰で現実離れた描写が目立つ。一方、少年たちの生活は次のように描かれている。

(相田は=引用者)臨終が迫ったことを自覚するや、「君が代」を歌ひ、万歳を二唱し、取囲む少年達に『皆さん、さやうなら、お先に行きます。』と言って静かに目をつぶった。(94頁)

一日の日課は、夏は四時半に床を離れ、五時半に点呼、食事を済ませ、六時から十一時まで或は畑に、或は建築場に、或は豚小屋に銘々受持の職場についた。／作業中は絶対に沈黙で、一切の発言は許されなかった。／十一時中食、一時半から再び作業開始、六時に終了して夕食をすませて、二時間ほど語学(満・露語)を主とした学科があり、八時半の点呼の後、故郷への便や読書などに過ごしてゐるうちに、九時半、消灯の太鼓が鳴響いて来る。(96頁)

相田少年の臨終の場面はドラマチックに過ぎるとも思うが、指導者たちの人間離れた姿に比べて具体的である。事実を踏まえているとすれば、少年たちの日課は相当に厳しい。

「饒河少年隊」では指導者が神格化・理想化されており、作品全体の半ばが彼らの事績に費やされている。本編の主演であるはずの、そして山田が「私は此の少年義勇軍がとて好きです」(自序)と心を寄せる少年隊員の生活や活動の様子は生き生きと描かれていない。亡くなった相田と鈴木を除き、少年たちの氏名も書かれていない。彼等への何らかの配慮から個人名や出来事の詳細を記述しなかったのかもしれないが、それにしても少年たちに寄り添い物語としての奥行きを作り出す工夫はできたのではない。

少年隊の活躍を山田は前年11月、国境に近い虎頭(虎林)の旅館で18歳の饒河少年隊員から聞いたと言う。彼は「少年隊の血と涙の苦闘ぶりと、それを取巻く神のやうな数名の国士たちの献身的な指導ぶりと、胸迫るやうな美しい話の数々を詳しく聞くことが出来た(72頁)」にもかかわらず、少年たちの生々しい姿は描かれていない。つまりは、「この少年たちの生活ぶりこそ、国民精神総動員運動⁸⁾の参考として最も相応しい(同)」と声明するとおり、「饒河少年隊」は国策の推進を念頭に置いたプロパガンダに他ならない。

ただ、この編が『少年義勇軍』の中で異質とも言えるほど突出していて、他との調和が意識されているとは考えにくいことも確かである。

そうしてみると、山田がこの編を一般の美談や民話にうまく配置し、全体として国策への馴化を促すべく『少年義勇軍』を構想したと決めつけることは合理的でない。逆に、この不調和が山田の国策への違和感を暗示しているともあながち不合理とは言えない。

6. 『満蒙開拓少年義勇軍』について

『満蒙開拓少年義勇軍』は、『満州叢書 祖国への道』全7巻の一冊として1983(昭和58)年に国書刊行会から出版された。

これは、1967(昭和42)年刊行『満州開拓少年義勇軍』と同内容である。戦後22年目に刊行され、さらに16年経って再刊されたわけだ。『満州叢書』の意図について、担当者は次のように言う。

一冊一冊が、父や子、母や妻が敗戦・逃避から難民生活を経て祖国にたどりつくまでを綴ったドキュメントであり、シリーズ全体では、それぞれの体験が綾なして、一つの「満州国瓦解記」となり、「邦人引揚げの全貌」として読むことができるように構成しました。（佐藤今朝夫）⁹⁾

この作品は、茨城県の日本国民高等学校などから選ばれた 13 人の少年がソ満国境の饒河で訓練所を建設し、訓練を経て少年義勇軍を結成するまでの第一部、伊拉哈大訓練所での生活を描いた第二部、敗戦の混乱と苦労の中、満州に残る選択するまでを描いた第三部から成る。それぞれ「創生記」（全 108 頁）「開拓記」（全 96 頁）「敗戦記」（全 40 頁）と名づけられ、全編を通じて山川宏が主人公である。

以下、この作品の性質が表れている幾つかの箇所を挙げてみる。

「表面は調査とっているが、実際は、新しい満洲国を双葉のうちに潰してしまおうとする危険人物を調べて、その間違っただけの考えを治すのが、一番の目的なんだよ」／「その危険人物というのは、どんな人ですか？」／「色々あるが、今度の調査は満人の役人が主だ」／宏が抗議するようにいった、／「現に満洲国を治めている満人の役人が、満洲国を潰そうとしているなんて信じられません」／「わしも少し前まではきみと同じ考えだったのだ。でも近頃になって、その考えが間違っていたことに気がついたのだ。なぜって、現に県長や官吏の中に、ひそかに亡びた国をもう一度建て直そうとしている役人が何人もいるのだ。……こういう役人たちは、その役目を悪用して善良な国民たちの心の中に喰い込み、その考えを変えさせてしまうから恐ろしいんだよ」／宏は少しわかったようにうなずいた。（86 頁）

主人公は参事官に率直な疑問を投げかけるが、満州国統治の論理に承服してもいる。

「おとうさん、駅まで行ってきます」／「日本の旗なんか持って、なにしに行くんだ」／「今日はね、また日本から少年義勇軍が来るんだから、五年生以上は全部迎えに行くんだよ」／「何……、また日本の百姓の子供が来るって？」／「そうよ。この前は四百人だったけど、今度は二千人も来るんだよ。みんな中学生ぐらいの年だって。やっぱり日本の子供は偉いね」／父

親の顔が、急にこわくなった。／「二千人も来るって？ そんな者を迎えに行く必要はないッ」（156～157 頁）

満州人の反発が具体的に語られている。戦中の『少年義勇軍』にはこうした場面はないが、作者の記憶には刻まれていたと思われる。

宏は李さんに、／「今度きた義勇軍です。どうぞよろしくお願いします」と挨拶した。……でも李さんは、知らん顔していた。盛文は、父の代理のように、／「ドーゾ、ヨロシク」と上手な日本語で挨拶しながら、宏の方に近づいて来た。……「盛文！ 日本人と話しをしたらいかん！」／盛文は、宏に詫げるように一礼して、父の方に駆けて行った。……ほんとに農地の買い上げとは名ばかりで、実際は、ただ同様の安い値段で、強制的に、どんどん買いあげてゆくことを何度も聞いた。／（これでも民族協和なのか！ これでも共存共栄なのか！）（161 頁）

主人公はあまりに善良かつ冷静であるが、現地到着の一週間後にして、「五族共和」の欺瞞に直感的な疑問を投げかけている。

少年たちは、国策かどうかは知らないが、村に偉そうな人がたくさんやって来て、しゃべりまくっていったこととだいたい話が違うことが、近頃になってわかってきた。それに、安田がいったように、供出とか、割り当てとかいわれ、半ば強制的に応募させられた者が多かったことも、みんな知っていた。それに、訓練所の生活は、今の戦況と、日本と満洲国の関係では、止むを得ないことも知れないが、それにしても、あまりひどかった。／「未来に生きる少年たちの生命を無視してまで、われわれを満洲に送り込まなければならないのか？」／「要するに、われわれは、侵略戦争の犠牲にされているのではないだろうか？」と考えてくると、抵抗を感じるのは、安田一人ではなかった。（176～177 頁）

少年たちは自分たちの立場を相対化し、国策に疑念を抱き、行動する。戦後の民主主義の立場から幾分脚色されている可能性もあるが、記述は具体的であり、核になる事実が存在したことについては疑いにくい。

空腹をかかえ、作業から帰って来て、食卓に飛びつく少年の瞳には、不満の色がハッキリ現れていた。……下痢患者の増加が目立ってきた。血便の出る者も一日、

一日とふえてきた。……宏はいつの間にかまつりあげられて、一日、所長に食糧の復旧を願い出た。／「君たちにいわれるまでもなく、よくわかっているんだよ。なんとかして元通りにしてあげたいんだけど、軍の命令で、どうにもならないんだ。もうしばらく我慢してくれ。……」／少年思いの所長は、頼むようにいった。／「では軍の方でも、もちろん、私たちと同じように減量しているんでしょうね？」／所長は、ハツとしたような顔つきで、唇に人さし指をあてながらささやいた。／「山川君、そんな質問が軍の耳にはいったら、大変なことになるよ」（188～189頁）

軍への不満、不信が表明されている。山川少年の言動は「出来すぎ」に見えるが、全くの虚構であるとも言えまい。記述は、実際の少年隊の空気を伝える具体性を持っている。

いきなり彼十八番のピンタが、宏の左右の頬に続いた。宏は歯を食いしばって我慢した。／「なんだその面はッ。きさま、おれに手向う気かッ？」……五十嵐はいきなり宏に飛びかかると、拳闘とも柔道ともつかない手つきで、宏をその場に投げとばした。／「立てッ！命令だッ！」……／五十嵐は狂気のように叫んだ。／……いつの間にか、入口から安田を先頭に何十人もの少年たちが、入ってきた。／どの少年の眼も血走っていた。……五十嵐の方に近づいて行った。五十嵐の顔色は急に青ざめてきた。／「きさまら、おれをどうする気かッ！」／声は相変わらず狂人じみていたが、語尾の方が震えていた。飢饉による食料不足が、少年たちの軍への反発を募らせる。（190～192頁）

軍への反発が具体的な行動として描かれている。これが実際にあったかについては検証の余地があろう。しかし、虚構というには描写が詳細である。

隊員たちは、報道とは逆に日本軍が敗色を濃くしつつあるという事実にも気付いている（220頁）。驚くことに、山田は日本から山川宏隊員を訪ねてくる女性を登場させてもいる。彼女は山川らと敗戦後の中国で生き、辛酸をなめる。

ハルピン郊外の義勇軍訓練所に、年の頃二十近くと思われる娘が訪ねて来た。一目で田舎娘とはわかったし、それに乞食の一步手前という不潔さで、服装も使いはたした雑巾のようだった。……「アッ、令子さん！」／宏は思わず駆けよって、よるめきながら立ちあがる

うとする令子の両手を握った。（220～221頁）

以上に見るように、『満蒙開拓少年義勇軍』はエピソードが具体的である。主人公が設定され、各人物が個として描かれているし、中国（満州）人への眼差しが温かい。女性が描かれ、恋愛の雰囲気を感じさせもする。軍への不満や怒りさえ描かれている。

敗戦による環境の変化に負うところが大きいにしても、戦中の作に比して自然で自由な創作の姿を認めることはできる。「饒河少年隊」からの懸隔は大きい。

エピソードは、18歳の隊員から聴いて書いたという「饒河少年隊」に比べてはるかに豊かで具体的である。「あとがき」には、「資料の収集はもちろん、各地の訓練所を視察、目と足で十数篇の義勇軍物語を書いた後、「それらの物語をまとめ、同じ年代の現代つ子に読んでいただきたい」と思い、また、農業については義勇軍の菅野正男の著作を参考にして著したとある。

（13人の少年が隊舎を建てるのにどう働いたのか、農作業の実際はどうだったかなどについては具体性に乏しい感じもするが。）

日本を背負う開拓者としての彼らは、敗戦で大陸をさまよった末に日本を相対化した。「今すぐ日本に帰ることはやめ、みんなでイラハに帰って冬を越し、その間に日本の様子を見て、来年みんなで揃って日本に帰るかイラハに住みつくか、改めて相談しよう（252頁）」という決定は、満州人の支援を得つつ皆の相談でなされたのであった。

7. 2つの作品に見る山田健二

民主主義社会の読者を意識しての脚色はあるが、戦後の『満蒙開拓少年義勇軍』は主人公が状況を相対化し自己を主張する点で、戦時中の「饒河少年隊」とは異なる。一方、『少年義勇軍』の幾つかの編は、美談に仕立ててはあがあるが、市井の人間のひたむきな姿に眼差しが向けられている点でやはり「饒河少年隊」とは異なる。

すなわち、山田の意識が戦中と戦後で断絶していると決めつけることも、『満蒙開拓少年義勇軍』が戦後の民主主義思想を要領よく取り込ん

で少年義勇軍のエピソードを組み立て直したものであると断じることもできない。

山田の意識は戦中から戦後にかけて根本的なところで繋がっていた。戦後になって、彼は戦時中に書けなかった事柄と思いを吐きだした。こう想定することには無理がない。それは、「まるで子供のような純粹さを持ち続けた人」という夫人の言葉と響き合う。

義勇軍の少年たちは敗戦直後、日本に見捨てられた彼の地で命を落としていった。18歳隊員から聞き取った少年隊創設時の姿とその末路との落差への哀惜と怒りが、山田に少年義勇軍というテーマに拘り続けさせた。とすれば、彼の本質はヒューマニストであったということになるろう。

客観的には山田は「国策」推進を担う立場であり、それについての自己省察を検証する必要がある。彼が同情を寄せる少年義勇軍についても、国策の犠牲者であると同時に中国民衆に対しては加害者であった¹⁰⁾。その両義性を措いて一方から語るのは不適切である。ただ、「現在」の高みから断罪するのは公平ではない。

注（引用文献）

- 1) 魏晨：日本人、「満州国」民、満鉄社員であること—山田健二の童話を中心に—、日本近代文学学会若手研究者ワークショップ（2013. 5. 26）
 - 2) 同上、発表資料
 - 3) 山田健二：少年義勇軍，序，満鉄社員会，1—2（1938）
 - 4) 大阪国際児童文学館編：日本児童文学大事典，第二卷，大日本図書，251（1993）＊山田健二の項担当：勝尾金弥
 - 5) 山田健二：満蒙開拓少年義勇軍，満州叢書・祖国への道 7，序，国書刊行会，7（1983）
 - 6) 山田健二：高粱の花環，新生堂，表紙（1934）
 - 7) 中村裕史：雑誌『旅行満州』～植民地ツーリズム雑考～その一，神奈川大学図書館だより No. 136（2012・4）
 - 8) 日中戦争勃発直後の1937年8月から「挙国一致・尽忠報国・堅忍持久」を掲げて推進された戦意高揚運動。翌年、国家総動員法
 - 9) 山田健二：満蒙開拓少年義勇軍，満州叢書・祖国への道 7，刊行にあたって，国書刊行会、257—258（1983）
 - 10) 少年義勇軍の成り立ちと実態等について、上笙一郎：満蒙開拓青少年義勇軍，中公新書（1973）、及び白取道博：満蒙開拓青少年義勇軍史研究，北海道大学図書刊行会（2008）を参照した。
- ＊ 本稿は日本児童文学学会第 52 回研究大会（2013・11）での発表をもとにした。